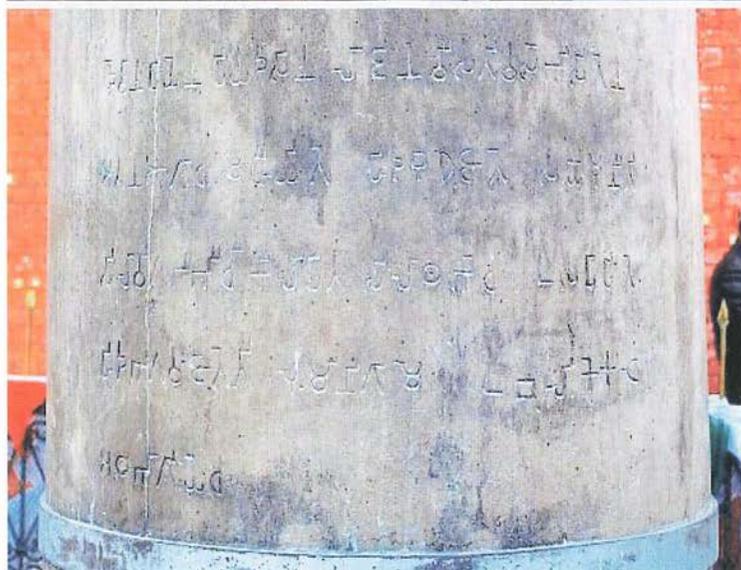


インド渡航歴40回超!

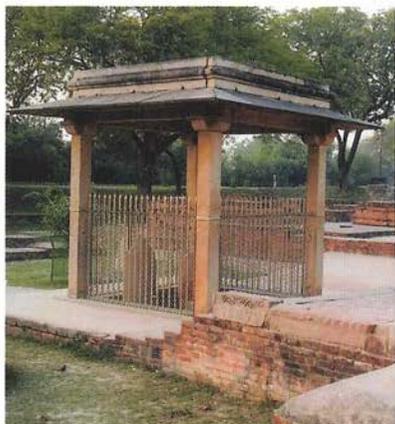
佐藤良純の No.23

インド・釈尊あれこれ紀行



ルンビニーに残るアショーカ王時代に建てられた石柱。下は柱に刻まれた刻文（ルンビニーに残る石柱のものではない）

アショーカ王と碑文



サルナートに残る途中から折れている石柱。石柵で囲われていて見えにくいですが、石柱2本が並んでいる



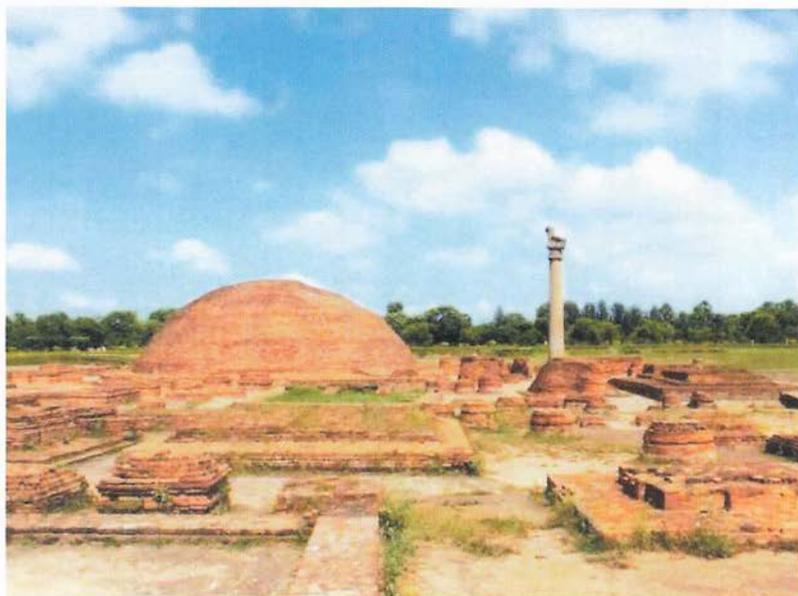
インドでは珍しい石柱を書いた絵

紀元前3世紀北インドを統治したのはマウリヤ王朝の第三世アショーカ王である。マウリヤ王朝とは孔雀王朝の意で、孔雀は毒蛇を退治するので魔除けの鳥とされ王朝を保護するとされた。

アショーカ王は多くの法勅を残しているが、現在のインドの東海岸オデイサ州にあるカリンガ国を征服した時に多くの命が失われたことが、そのきっかけとなっている。アショーカ王は大いに反省し、国を統治するのは武力ではなく「法」、すなわち「正義」「宗教」によらなければいけないとし、多くの勅令を残した。ちなみに現代インド語で「法」は「宗教」を意味する。

勅令は石柱、岩に彫られ、ほとんどがブラフミーと呼ばれる左から右に読むサンスクリット語だが、東北インドで用いられるアラム語は右から読む。

岩に刻まれたもので多いのは、生物を殺し



ヴァイシャリの石柱。インド仏跡ツアー訪問地のひとつだ

てはいけないとする不殺生を意味する言葉で、人間、動物の全てを含む。また人々のため、家畜のために病院を作り、井戸を掘らなければいけないとする。また法令を守るため法大官を置き、裁判は正確を期するため一審二審の制度が置かれた。またすべての宗教を保護することも定められている。

アショーカ王が釈尊誕生の地、現在はネパール領のルンビニー村を訪れたのは即位して二十年目のことである。ルンビニーの石柱には、釈尊誕生の地として立派な石柵を石柱の周りに巡らせ、またルンビニー村は税金を免除され、生産物の税金も八分の一のみとする、と記されている。

ガンジス河沿岸のコーサンビーの石柱には、僧団の規則を破るものは出家者の黄色い着物を着させず白衣を着せ、精舎にも住まわせない、人々は仏・釈尊、法・釈尊の教え、僧・比丘、比丘尼の僧団を尊敬しなければいけない

